

## 帚木・空蟬両巻における光源氏の体験

望月郁子

源氏物語の主人公光源氏が女主人公紫の姫君と出会うのは若紫巻である。その前に、桐壺・帚木・空蟬・夕顔の四つの巻がある。

桐壺巻は桐壺帝を中心とする宮中の語りである。

桐壺巻から帚木巻に移ると、語り全体の雰囲気がからりと変わる。「ただ人」光源氏が涉っていかなければならない臣下の世界となる。帚木・空蟬・夕顔の三巻を通して光源氏はさまざまの体験をする。

光源氏が一生の伴侶を決める若紫巻を理解するために、当該三帖を、若紫巻に至る下地として、理解すべきは理解しておかなければならない。

というと、紫上系・玉鬘系の巻々の区別、成立論を無視するのかもしれないが、まずは、帚木三帖の語りの内容そのものを理解し、内容上、若紫巻に直結するか否かの確認を優先したい。

紙巾の都合上、ここでは、帚木・空蟬の二帖までに留め、次の順に論じたい。

一 帚木卷の冒頭部分

二 雨夜の品定めにおける左馬頭の女性論（左馬頭と頭中將の体験談は、「スキガマシキアダ人―帚木卷の頭中將」として別に論じた。<sup>(1)</sup>）

三 光の空蟬との交渉

I 光源氏の本性 1「女にて見たてまつらまほし」 2 ストイック性 3 空蟬小君とのホモ的關係

II 卷の立て方―帚木卷と空蟬卷との繋がり

III 老女の役割―道化による人違えの後始末

一 帚木卷の冒頭部分

長編物語の二番目の卷の語り始めである。本文を省略せずにあげる。

「光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠るへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少將には、笑はれたまひけむかし。

まだ少將などにもものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかだたまふ。忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。（帚木五三〜五四）」

二段からなっている。

冒頭を「光源氏」と語り出す。周知のことであるが、桐壺巻の最後は「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつきたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ。」で終わった。その「光る君といふ名」をそのまま、「光源氏」が冒頭に据えられている。これは、先行の巻（桐壺巻）との直結である。

一段。「さるは」の前までは、光の対女性関係についての女房社会のゴシップを作者が「もの言ひさがなさよ（無責任デ意地悪ナオ喋リデ）」と批判し、「さるは（実ハ）」以下、真の光は、ゴシップとは違う、真面目一本で、興味をかきたてられる女性関係などはないという。光について、ゴシップと実相との乖離の理解が冒頭で読者に要求されている。とはいえ、ゴシップの中の「かかるすき事ども（コノヨウナ色ニ走ル事）」とはが、ここで明らかにされていない。謎であり、読者の想像に委ねられている。これは、読者をファーストインプレッション即ちゴシップの世界に誘い込む巧妙な手法である。素直に読めば、誰しもが「かかるすき事ども」とは、に引っ掛けられ、これが意識の片隅に残るであろう。光が好色だという意識が読者に定着しやすい。

二段。光が桐壺帝のお側でのお仕えに精を出し、葵上に足が遠退くという部分は、桐壺巻の最終（一七段）の「源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず、（四九）」と実質一致すること改めて言うまでもない。先行する巻の内容が次の巻に継続していることの明示である。これは、この先書かれる長編物語が、巻が変わっても内容は継続するというハ凡例Vの役割を担うものでもある。続けて「さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性」が強調される。一段の「さるは」以下と矛盾しない。

最後の「さるまじき御ふるまひもうちまじりける。」が問題である。サルマジキはそんなことは決して許されないの意。フルマヒは、自由気ままな行為・行動をいう。このケルは実は〜であったの意。桐壺巻以降、帚木巻の始めまでのどこかで、光は藤壺に、父帝の許可なく、接近した可能性があるかと読むべきではないか。重要な一文である。事態は深刻な進み

方をしているとなる。これと呼応するかのようには、雨夜の品定め最後に

「君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。(九〇〜九二)」

と、光にとって最も大切な女君、藤壺に対する光の理解の広がりや深まり、思慮のつよさが、こういう語り方で示される。大切なものほどあらわに語らない。「さるまじき御ふるまひ」的な言い方、これが源氏物語の語りの特徴の一つである。

以上、長編物語の第二の巻帚木の巻頭である。直前の巻桐壺の最終部分と多くを重ねながら、藤壺との交渉の進展をほのかに証している。これだけの配慮が第二の巻帚木の冒頭の叙述に払われている。第二の巻が第一の巻と直結していることの強調である。

和辻哲郎が、「帚木の発端は、後に来る物語を呼び起こすべき強い力を持っているが、それに先行する何の描写をも必要とするものではない。かくて我々は、帚木が書かれた時に桐壺の巻がまだ存在しなかったことを推定しなければならぬ。〔思想〕大正十一年十一月」として以後、現在なお和辻説は重視されている。これに触発されて成立論が展開され、現在に至っている。長編物語の第二の巻の巻頭はどうあらねばならないか、桐壺巻の巻末と第二の巻の冒頭との重なり、作者の周到的配慮を、和辻は一切無視している。長編物語の第二の巻を書くに当たって何がどう強調されているのか、後述のごとく、帚木三帖は、それをくどい程説くのであって、仮に、源氏物語が帚木から書き始められたのであれば、それらの強調は必要なかったとしかならない。

## 二 雨夜の品定めにおける左馬頭の女性論

へただ人Vとなった光に必要なのは、臣下との付き合い・臣下の世界・とりわけ男女の仲とはを知ることであろう。物

語は、場面を宮中で光の宿直所、時を初夏の長雨の物忌みの一夜とし、光・頭中将・左馬頭・藤式部丞の四人の男の夜明しの会話という形式で、「いと聞きにくきこと多かり（帚木五八）」と前置きして、これを語っている。男四人の雨夜の物忌み・夜明しの語りは、夕顔巻に「ありし雨夜の品定め（一四四）」と言われているが、△品定め▽の概念規定が明確でない。上中下三品の各々を上中下三生とする『観無量寿経』の九品浄土の分類を、人間の分類基準とする意と解しておく。女性である作者が男性だけの四人に、男女の仲・女性論を語らせるという場面設定自体が独自である。（頭の中將の△好きガマシキアダ人▽ぶりを女性作者が語るには願ってもない場面設定である。体験談は別に論じた。<sup>(1)</sup>）

左馬頭は物語登場時点で、「世のすき者にて、ものよく言ひとほれる（五八）」と、紹介されている。光を意識して語る左馬頭の主張の要点を、語られる順序に従って列挙する。それが将来、光によってどう生かされるか、繋がりの可能性がありそうな部分には、当該部分の頭に a b ∴ を、末尾に当該女性名を記す。

中將の「中の品（受領階層）」を可とする主張を、光が財力が全てかと一笑に付した後、語りは左馬頭の独走となる。左馬頭は、中將の話題を承けるかのように「もとの品、時世のおぼえうち合ひ、」とはじめるが、「心」が「おどろく」のは「めづらかなること」に対してであるとし、品論は展開させず、「∴なにがしがおよぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。（六〇）」で切り、「思ひの外」の「めづらし」さの感動を具体例をあげて説く（六〇～六一）。

a 「さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉じられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえぬ。∴片かどにても、いかが思ひの外にをかしからざらむ。（六〇～六一）」∴空蟬・

夕顔・北山の紫

話題を「わがものとうち頼むべき（生涯の伴侶）」の選びに絞り、政界の相互協力を例に、一家の中も「足らばであしかるべき大事どもなむかたがた多」く、「なのめにさてもありぬべき人」は少ない。「わが力入りをし直しひきつくるふべき

ところなく、心になふやうにもやと選りそめつる人の定まりがたきなるべし。(六二)と、万能完璧な女性を望むと、次から次へと女性を求めることにしかならないと言う(頭中将批判か)。理想通りではなくとも「見そめつる契り」を大切に、二人の仲を長続きさせなければならぬと説く。

b「かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを棄てがたく思ひとまる人はものまめやかなりと見え、さてたもたるる女のためも、心にくく推しはからるるなり。(六一)：葵上・末摘花

特に、若い女は、自分の欠点をうまく隠して、男を近付け、「とりなせばあだめく(六三)」。男の立場がなくなる。「これをはじめの難とすべし」というのは、貴族社会一般の青年の常識であったのであろう。

主婦の仕事の中で、男の後見(世話、衣食住の指揮・責任)は「なのめなるまじき(六三)」ことであるが、家の外での男の立場、苦しみ、同僚にも言えない胸の内などを「聞きわき思ひ知り」、「語りもあはせばや(六四)」と思う男の気持ちを理解し支え合える女性であって欲しい。また、男の留守中でも、「あだ事にもまめ事にも、わが心と思ひ得る」「深きいたり(六五)」もなければならぬと、女性の知識の高さと広さ、精神的自立性の必要を説く。理想の妻は、男が自分で女性をそのように育てなければならぬとする。

c「ただひたぶるに兎めきてやはらかならむ人をとかくひきつくるひては、などか見ざらむ、心もとなくとも、直しどころある心地すべし。(六四)：夕顔・紫

更に、人の品も容貌も問わないとして、生涯の伴侶の条件を、

d「今は、ただ、品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねじけがましきおぼえだになくは、ただひとへにものまめやかに静なる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。(六五)：

「うしろやすくのどけきところだに強くは、うはべの情はおのづからもてつけつべきわざをや。(六五)」  
と言う。徹底否定されるネジケガマシとは、素直・正直に対する意地悪さ・ずるさ・悪賢さ…を言うか。

ついで、夫の浮気への女性の対応に及び、我慢できなくなつて、歌や形見を残して行方不明になり、出家する女の具体例をあげ、よりを戻しても、男女とも、心にしこりが残る。また、男の浮気を「恨みて気色ばみ背かん、はたをこがましかりなん。…さやうならむたぢろきに絶えぬべきわざなり。(六七)」と警告し、この二つの場合も、「やがてあひ添ひて、とあらむをりもかからむきざみをも見過ぐしたらむ仲こそ、契り深くあはれならめ(六七)」「心はうつろふ方ありとも、見そめし心ざしいとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに(六七)」と、女の心の持ち方で、破綻を回避可能とし、女性の最上の対応を

e 「すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。多くは、わが心も見る人からをさまりもすべし。(六七〜六八)」

…紫

と説く。

更に、芸能をたとえにしながら真贋を論じ、

「まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思うたまへてはべる(七〇)」  
と注意を述べ、体験談に移る。「人の心」に留意したい。夫婦仲の最も大切なものが「人の心」の真であるのはいうまでもないが、左馬頭の口を借りて、こういう文脈の中で、「人の心」をちらりと出す作者である。

体験談の中で、将来、光によって生かされる可能性のありそうな部分を添えておく。

f 染色・機織り・裁縫など、衣生活についてのセンスと腕がある。

「童田姫と言はむにもつきなからず、織女（たなばた）の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし（七六 指喰いの女の懐古）」…紫・花散里

g「いま、さりとも七年あまりがほどに思し知りはべなむ（オ判リナサルデゴザイマシヨウ）。<sup>(2)</sup>なにがしがいやしき諫めにて、すきたわめらむ女に心おかせたまへ。過ちして見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」と戒む。

（八〇 木枯らしの女との体験を踏まえて）」

最後に左馬頭は、高い教養を身につけ知識豊かな女性が、教養知識を人に示す時のあるべき心がけに及び、

「すべて男も女も、わる者は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさむと思へるこそ、いとほしけれ。（八九）」と前置きして、女性の漢字漢文の知識の表し方、男への社交の歌の送り方を、具体例をあげて批判し、

h「すべて、心に知らむことをもしらず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなく、  
むあべかりる（九〇）」…紫  
とする。

以上が、「世のすき者にて、ものよく言ひとほれる」左馬頭の、語りの要約である。

女性論と言われてきたこの語りは、聞き手である光にとっては、上掲 a b：部分に見てきたが、将来の女性遍歴の指針的役割を果たし、その意味で重要な布石であり、帚木巻内にとどまらず、後続の巻々に繋がる水流の源である。

左馬頭は「臨時の祭の調楽」を勉める。「世のすき者」<sup>(1)</sup>とは、そのように諸芸能に通じている（六九〜七〇）のもさることながら、男女の仲とはがよく判っており、さらに体験談に見てきたように他者の色事も敏感に感知できる、そういう人と言うのではないか。「ものよく言ひとほれる」とはであるが、要約すれば短絡化してしまうが、確かに、男女双方の立場から多岐に渉って論じられている。



左馬頭の語りを聞き、体験談を聞き、それらに続けて、男本位に徹底し、女の状況と心を知ろうともしない頭中将のい<sup>(1)</sup>気さをつきつけられると、左馬頭の論の用意周到さが際立つ。

とはいえ、左馬頭の論は、女が男の心を汲み、女の忍耐寛容が、男女の仲を維持し、結果として女が我が身を守り通せるといふ筋の論である。男に語らせているが、論の根底にあるのは、あくまで女性の立場である。

しかし、この論に、男女の相互協力を重ねれば、男の忍耐寛容を女が求めることも論として成立し得る。後の語りであるが、新手枕における光に対する紫の抵抗<sup>(3)</sup>が可能となる。新しい男女主人公の誕生の伏線の論となり得ている。

### 三 光の空蟬との交渉

「三一」(光の本性) 長編物語の主人公光源氏の女性遍歴を語るに先立って、第二の巻で光の本性にスポットライトが当てられている。

「三一」(女にて見たてまつらまほし) 男四人による雨夜の物忌みの夜明しの語りの場で、もっぱら聞き役で通す光の美しさを、

「白き御衣どものなよやかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選び出でて、なほあくまじく見えたまふ。

(六一)」

と、「女にて見たてまつらまほし」と見るのは、左馬頭だけではあるまい。同席の男三人共有の意識であろう。この夜の光は、男四人による雨夜の物忌みの夜明しの語りの場で男性であると同時に、三人にとっては女性でもあるとなる。

ちなみに、七歳当時、

「弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見  
てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、な  
ずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをか  
しううちとけぬ遊びぐさに誰も誰も思ひきこえたまへり。(桐壺三八〜三九)」

と、弘徽殿腹の桐壺帝の内親王二人よりも「なまめかしう」、桐壺帝が御簾の内に入れるのを、女御方は歓迎したという。  
七歳の光は男の子でありながら、女御方には同性の子供以上に魅力のある存在と意識されていた。元服以前のこの体験は、  
光に、父の女御方を理解させただけでなく、高貴な女性への対し方―やわらかな物言い・物腰―を身につけさせ、自らの  
女性的素質を自覚させたであろう。

「三I2」(ストイック性) 葵上を除いて、光の女性との接触場面が物語の中ではじめて語られるのは、空蟬とのそれ  
あり、次いで夕顔とである。この二人との接触を通して、光の女性への対し方、女性の何をよしとし、何に牽かれるか、  
光の本性が具体的に語られる。

空蟬に対する光の先入観は、

「上にも聞こしめしおきて、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』といつぞやのたまはせし。(帚  
木九六)」

を踏まえて、光は空蟬を「思ひあがれる(理想の高い)(九四)」女性とと思っていた。現実には、空蟬は父の死後、伊予  
介の妻におさまり、光が方違えで、紀伊守(伊予介の子)の邸に出向いた日、紀伊守の邸に来ていた。

光は空蟬に「いとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきはひ(九九)」で接近し、「∴動もなくて、奥なる御座  
に入りたまひぬ。(一〇〇)」以下、邪魔の入らない場で口説くが、空蟬は

「まめだちてよろづにのたまへど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人がらのたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。(一〇一)」

「いとかくうき身のほどの定まらぬありしながらの身に、かかる御心ばへを見ましかば…よし、今は見きとなかけそ(一〇二)」

と、人妻である現実を守り、光を傷つけないように気を配りながら、自分の対応の在り方をきちんと決めて動じない。光が守られている。光の先入観「思ひあがれる」ではなかった。光が、仮に空蟬の気持ちを無視し、自己の名誉にかけて欲求を押し通そうとすれば、出来ない状況ではない。「さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性(五三)」そのままの光である。女性が許さなければ、自分の欲求の抑制がきちんと出来る。その意味でストイックである。光は、満たされぬまま、歌を唱和して、別れる。

「月は有明けにて光おさまれるものから、かげさやかに見えて、なかなかをかしきあけぼのなり。何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、…(一〇四)」

と、名文に託して光の心が語られる。「自然は見る人の心に従う」と云ったのはヴァレリーである。  
帰宅後、光は、

「すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありける中の品かな、隈なく見あつめたる人の言ひしことは、げにと思しあはせられけり。(一〇五)」  
と、左馬頭の論の確かさをかみしめる。

一度で諦めきれない光は、紀伊守を介して、空蟬の弟小君を手許に引き取る。

「この子をまつはしたまひて、内裏にも率て参りなどしたまふ。(一〇八)」

小君を介して文を送るが、空蟬は露見をおそれ、

「めでたきこともわが身からこそと思ひて(小君に対する光のご好意を実らせるか否かも、姉の自分次第だと思ひ)、うちとけたる御答へも聞こえず。(一〇九)」

と、極めて理性的に光と小君と自分を守っている。

次の方違えの日まで待って、突如中川の邸を訪う。内々の連絡を受けて空蟬は、小君に報せず女房中將の局に隠れる。光は遂に会えない。

「尋木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな

聞こえむ方こそなけれ」とのたまへり。女もさすがにまどろまざりければ、

「数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる尋木」

と聞こえたり。(一一二)」

「III」(空蟬小君との光のホモ的關係<sup>5</sup>) その夜、

a 「:」よし、あこだにな棄てそ」とのたまひて、御かたはらに臥せたまへり。若くなつかしき御ありさまをうれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりはなかなかあはれに思さるとぞ。(尋木一二三)」

b 「寝られたまはぬままに、「我はかく人にくまれてもならはぬを、今宵なむ初めてうしと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくてながらふまじくこそ思ひぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの、細く小さきほど、髪の毛いと長からざりしけはひのさま通ひたるも、思ひなしにやあはれなり。あながちにかか

づらひたどり寄らむも人わろかるべく、まめやかにめざましと思ひ明かしつつ、例のやうなものたまひまつはさず、夜深う出でたまへば、この子は、いといとほしくさうざうしと思ふ。(空蟬一一七)

光は、空蟬の実弟小君を横に寝かせ、拒否しない小君を「あはれ」と思ひ(a)、「手探りの細く小さきほど、髪の毛とながらざりしけはひ(b)」に空蟬を抱いた時の記憶を重ね、わずかに自分を慰め、屈辱感に押し拉がれたまま、暁にもならないうちに中川の邸を出た。a bの光は、実の弟に姉の代役をさせている。

その後も光は執拗に空蟬を求め、義理の娘である軒端の萩と碁をうつ空蟬を垣間見、軒端の萩の肉体美と対照的な空蟬のたしなみのよさ—いわば女性の魅力の両面—を初めて目撃した後、小君に手引きをさせて空蟬の寝室に忍び入ったが、空蟬は気付いて逃げ、光は軒端の萩相手に人違いの体験をし、残された空蟬の小桂を持ち帰った。

「ありつる小桂を、さすがに御衣の下に引き入れて、大殿籠れり。小君をお前に臥せて、よろづに恨み、かつは語らひたまふ。「あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそえ思ひはつまじけれ」と、まめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。：畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

：かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見るたまへり。(空蟬二一九〜二三〇)

苦悩の末の三度目のチャンスに、小桂だけを残す空蟬と化して、徹底して身を護る彼女の身の護り方を「なほ人がら(血筋ノヨサ)のなつかしき」と評価する光である。拒否される度につる空蟬への思いを、空蟬の小桂を手にして多少とも癒すことができるのは、光が敗北しながらも、彼女の「人がら」をまさにナツカシと思うからである。衣に持ち主の魂を求めもする光である。

「三二」(巻の立て方―帚木巻と空蟬巻との繋がり) 帚木巻の冒頭から以上の終わり迄を、どこで切って巻を立てるか、巻の立て方が問題である。

可能性としては、雨夜の品定め終わりまでを一巻、空蟬との三度の交渉を一括一巻、ということもあり得る。しかし、源氏物語の現実には、冒頭から空蟬への二度目の接近失敗までを「帚木」と名付けて第二の巻とし、以降三度目の終わりまでを量は少ないが「空蟬」と命名して第三の巻とする。等量に分けるのではない。空蟬の光に対する対応、つまり、女による男を拒否する拒否の仕方、避け方が最重要視されている。雨夜の体験談では語られなかった男に対する女の抵抗の仕方、避け方であり、光にすればそれぞれが忘れられない初体験である。巻名の帚木(近付くと消える木)・空蟬(抜け殻)は、共に伊予介の妻による光拒否の方法であり、光が二人の仲のシンボルとして歌のキーワードとした語である。これは、以下の巻々における巻名の凡例でもある。

「帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな

聞こえむ方こそなけれ」とのたまへり。女もさすがにまどろまざりければ、

数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

と聞こえたり(帚木一一二)」

「さしはえたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

と書きたまへるを(小君は)懐にひき入れて持たり。：(姉に見せると)さすがに取りて見たまふ。：つれなき人もさこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、とり返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな（空蟬一三二）  
拒否しながら女も光の言うシンボルに自らを同化させている。

帚木・空蟬両巻の境は、その実、a b（上掲「三一三」）の境で、切るに切れない。a bとも場面は紀伊守の邸内の同一場面、時間はaからbにそのまま続く。表現上はaの文末を「…とぞ」で結んだだけである。意表を衝く切り方であるが、二つの巻はしっかり繋がって切り離し様がない。

a bの内容に相違を強いて求めれば、光の小君への対し方にホモ性を気付かせるのがa、光が姉を小君に重ねて小君の肉体を求めなのがbである（前述「三一三」）。帚木巻の最終部分aと空蟬巻の冒頭部分bは、極めて特異な内容である。そこを巻の切れ目とする作者の意図は、二つの巻の繋がりを強調することが一つ、更に、長編物語のはじめのこの部分で、光と空蟬の実弟小君とのホモ的關係を、ストイックに撤した果ての、弟に姉を求める關係として読者に示し、主人公光源氏に対するストイック性の試練を読者に認識させる必要があった（後の、新手枕における紫の抵抗<sup>(3)</sup>を光が容認する下地固め・伏線）と見る。

「三一三」老女房の役割―道化による人違えの後始末

三度目の接近に失敗した光が、小君と紀伊守の家を出ようとして老女房につかまる。

「戸をやを押し開くるに、老いたる御達の声にて、「あれは誰そ」とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、小君「まろぞ」と答ふ。「夜半に、こはなぞと歩かせたまふ」とさかしがりて、外<sup>と</sup>ぎまに來。いと憎くて、小君「あらず。ここもとへ出づるぞ」とて、君を押し出でたてまつるに、暁近き月隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ、「またおはするは誰そ」と問ふ。「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとの丈だちかな」と言ふ。丈高き人の常に笑はるるを言ふなりけり。老人、これを連ねて歩きけると思ひて、「いま、ただ今立ち並びたまひなむ」と言ふ言ふ、我もこの戸より出

でて来。わびしけれど、えはた押しかへさで、渡殿の口にかい添ひて隠れ立ちたまへれば、このおもとさしよりて、「おもととは、今宵は上にやさぶらひたまひつる。一昨日より腹を病みて、いとわりなければ下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、昨晚（よべ）参上りしかど、なほえ堪ふまじくなむ」と憂ふ。答へも聞かで、「あな腹々。いま聞こえん」とて過ぎぬるに、からうじて出でたまふ。なほかかる歩きは軽々しく危かりけりと、いよいよ思し懲りぬべし。（空蟬一二七〜一二八）」

光が小君と外へ出ようしすると、老女房が声をかけ、ついて外まで出てくる。小君を付した「まるぞ」「あらず。ここもとへ出づるぞ」のはじめの二つの小君の返事以外は、すべて、老女房の勝手な自問自答で、小君にもその連れ（光）にも、口を挟ませない。光を見て「（のっぽの）民部のおもと」と勝手に決め、「上（空蟬と軒端萩の寝ていた部屋）にいたのは」と言う。軒端の萩はその名からおして「丈高き人」である。「自分もあのお部屋にいた」ともいう。空蟬が逃げ、光が軒端の萩と人違いのゲームに陥ったのを見ながら、目の前の光に「あんたは民部のおもと」といつてのけ、腹痛を落ちにしてその場を去る。

こういう道化が光を救っている。老女房の一役である。

総じて、帚木・空蟬の巻は、凝りに凝った巻である。頭中将のスキガマシキアダ人ぶりを容赦なく描き、左馬頭による女性論の披露、それを踏まえて、中の品の女性を対象としての光の対女性体験が描かれるのであるが、伊予介の後妻による二度にわたる光拒否を帚木・空蟬をシンボルに描き、その中で、彼女の弟とのホモ的關係、肉体豊かな軒端の萩と精神面に魅力のある空蟬の対比、衣にその持ち主の魂を求め、その果てが老女房による後始末の茶番劇と、多様に涉り濃厚である。へただ人Vとして生きなければならぬ主人公に一挙にさしだされる多種多様、かつ濃厚な対女性体験である。



〔注〕

- (1) 望月郁子「スキガマシキアダ人―帚木卷の頭中将」二松學舎大学人文論叢第75輯 平成17年10月
- (2) 「七年あまりがほどに思し知りはべなむ。」の部分。小学館新編日本文学全集『源氏物語1』八〇頁の頭注は「左馬頭は源氏より七歳年長らしい。」とする。ちなみに、頭中将であるが、葵上が光より四歳年長であることから推して、七歳上で左馬頭の言う「思し知」って当然の年令であるのではないか。とすれば、続く本文「中将、例のうなづく。」と整合する。  
源氏にとって「七年あまりがほど」は、現在光十七歳とすれば、二十四～二十五歳にあたる。桐壺院崩御（二三歳一月）、藤壺出家（二四歳暮）、朧月夜との密会露見（二五歳）、須磨下向（二六歳三月）となる。左馬頭のいう「すきたわめらむ女」に朧月夜が該当しているとすれば、光源氏と朧月夜との関係が、左馬頭の予言的中となる。
- (3) 望月郁子「新手枕での、光に対する紫の抵抗」二松學舎大学人文論叢第七十四輯平成17年3月
- (4) 「めでたきこと」の解釈は、及川和憲氏のヒントによる。
- (5) 川添房江「性と文化のアンドロギュヌス」『性と文化の源氏物語 書く女の誕生』筑摩書房一九九八年二月